

■ ■ 第441回和漢研セミナー ■ ■

講演者 藤井 宣晴 博士

東京都立大学

大学院人間健康科学研究科・教授

演 題

新規マイオカインの探索とそれら機能の解明

骨格筋は動作を生む源の器官であり、収縮することで骨格に動きを与えることが主とした役割と考えられてきた。しかし最近、インスリンとは独立した筋収縮依存的な糖輸送機構を備えることが明らかになるなど、これまでに知られてこなかった役割を有していることが明らかになりつつある。そのような例の1つにマイオカインがある。これは「myo = 筋」と「kine = 動作」をつないだ造語で、骨格筋細胞から分泌されるホルモン様生理活性因子の総称である。つまり骨格筋は、分泌器官としての役割も有し、多彩な因子を分泌している。我々のグループは、新規マイオカインの探索と、それら機能の解明に挑戦してきた。マイオカイン研究はまだ歴史が浅いこともあって、不確かな情報が独り歩きしてしまうことが少なからずあった。そのため、科学的に信頼のおける実験データを得るための実験系が必要とされ、かつ冷静な考察が要求されてきた。これらの条件を整えながら、新規マイオカインの発見とそれらの機能解明についてやしてきた、一喜一憂の歴史を紹介したい。

日 時： 2024年7月19日（金）14時00分 ～ 16時00分

場 所： 民族薬物資料館3階会議室（杉谷キャンパス）

主催：和漢医薬学総合研究所

連絡先：複雑系解析分野 中川 嘉（076-434-7610）

■ ■ 第442回和漢研セミナー ■ ■

講演者 芳賀 優弥 博士

大阪大学大学院薬学研究科・助教

演 題

難治性がんにおける薬剤抵抗性/耐性研究

分子標的医薬や免疫チェックポイント阻害剤の開発進展に伴い、がん治療薬は優れた治療効果をあげています。一方、分子標的医薬などの抗がん剤については、投与期間が数ヶ月から数年と長期化していくのに従って腫瘍に対して次第に薬が効かなくなる『薬剤耐性』を獲得することが懸念されています。腫瘍が一度薬剤耐性を獲得してしまうと、治療薬の方針転換を迫られることとなります。そんな中、近年、「どのようにして薬剤耐性細胞が出現するのか？」について研究が進められており、数日から数週間といった治療初期に既に薬が効きにくい『薬剤抵抗性細胞』が存在することが提唱されました。薬剤抵抗性細胞は、長期的に出現してくる薬剤耐性細胞の根源となる細胞集団であることから、その分子機序の解明や脆弱性に着目した抑制法の開発が進められています。このように複雑多岐に渡る薬剤抵抗性/耐性の過程に着目した、研究の最前線について紹介し、我々が取り組んできた成果についてもご紹介できればと思います。

日 時： 2024年7月19日（金）16時30分 ～ 18時00分

場 所： 民族薬物資料館3階会議室（杉谷キャンパス）

* 本セミナーは大学院講義「分子細胞生物学序論」を兼ねますので履修者は必ず受講してください。

主催：和漢医薬学総合研究所

連絡先：未病分野 小泉桂一（076-434-7633）